

4. 名古屋市の野生生物の現状

哺乳類

① 名古屋市における哺乳類の概況

既存の名古屋市における哺乳類の生息情報については、主に「レッドデータブックなごや2004」(名古屋市, 2004)、「レッドデータブックなごや2010(2004年版補遺)」(名古屋市, 2010)、「新修名古屋市史資料編自然目録」(名古屋市, 2008)を参考とした。また、最近の情報として「東山新池かいぼり事業」(なごや環境大学, 2007)、「なごやため池生きものいきいき事業」(なごやため池生物多様性保全協議会, 2009~2011)、「都市部における生物多様性の保全と外来生物対策」(なごや生物多様性保全活動協議会, 2011~2013)で著者らが実施した哺乳類調査の結果を追加した。その他、なごや生物多様性センターに寄せられた情報や新聞記事を参考資料とした。これらについては、確認場所や日時、写真、標本が残っているなど、信頼に足ると判断された情報および名古屋市各区の環境事業所から寄せられたへい死個体の回収記録(2012~2013年)を参考とした。

新たな現地調査は2012~2014年にかけて実施した。陸生の哺乳類については、フィールドサインの確認、センサーカメラによる自動撮影、各種トラップによる捕獲調査を行った。また、飛翔するコウモリ類については、エコーロケーションコールの録音とその解析による同定を試みた。

以下の哺乳類については、名古屋市で生息が確認された種のリストから除外した。

- ・海生哺乳類では、本来の生息域から離れ、死んだ状態で漂流していた種(マッコウクジラ)、または、迷入したと推測される種(シャチ、イシイルカ、カマイルカ)。
- ・家畜化された品種(イヌ、イエネコ、フェレット、カイウサギ)。
- ・野外で見つかっているが、繁殖が確認されていない外来種(アムールハリネズミ)。

これらを検討した結果、今回、名古屋市で生息が確認された哺乳類は、在来種、外来種、絶滅種を含め、8目19科30種であった。以下、名古屋市に生息する哺乳類相の特徴を地域ごとに述べる。

東部地域(山地および丘陵地)

東部地域には樹林地が広く分布しており、その多くは現在、公園緑地や風致地区として残されている。東部地域の最北東部にある東谷山は市内最高峰(198.3m)の山地で、ニホンリスやムササビ、ニホンテン、カモシカといった森林性の強い種の主要な生息場所となっている。現時点では周辺山地との連続性が保たれているため、近隣からの個体の流入があると推測され、ニホンザルの「離れザル」や最近まで市内では確認できなかったカモシカの他、市内ではすでに絶滅したと考えられていたイノシシが最近になって確認されている。カモシカやイノシシについては子連れの子も確認されており、すでに東谷山地域で繁殖しているものと推測される。その他、ニホンイタチについては、今回の調査で1個体のみが東谷山山麓の農地で確認された。外来種であり競争種でもあるシベリアイタチが市内全域に分布を広げた現在、ニホンイタチが

市内で生き残っている場所は、東谷山地域のみである可能性が高い。ニホンノウサギについても最近の記録は東谷山のみである。これまで市内での記録がほとんどないニホンテンについては、今回、東谷山の瀬戸市側でその生存が確認された。

東谷山麓のため池周辺では、エコーロケーションコールの音声解析により、キクガシラコウモリ、オヒキコウモリが確認された。また、この解析によって、上記の種とは明らかに異なるコウモリ類の生息も示唆された。東谷山から北東へ6kmほど離れた場所には、キクガシラコウモリを含めて数種類のコウモリ類がねぐらとして利用する「愛岐トンネル群（岐阜県多治見市）」が存在する。飛翔可能なコウモリ類の場合、市外のねぐらから市内へと採餌に訪れている可能性も十分に考えられる。

このように、東谷山地域は現在も周辺山地との連続性を保っており、市内の他の地域ではほとんど見られない種の生息地となっている。東谷山地域は、市内における哺乳類のホットスポットでありコアエリアとして非常に重要な位置を占めているといえるだろう。一方で、アライグマ、ハクビシン、シベリアイタチといった外来の哺乳類もすでに東谷山一帯に生息しており、今後、在来種への影響や他地域への広がりも含めて注視が必要である。

東部地域には、東谷山以外にも小幡緑地、明德公園、平和公園、東山公園、牧野ヶ池緑地、猪高緑地、相生山緑地、大高緑地といった規模の大きい緑地が多数点在する。かつては繋がりが保たれていたこれらの緑地も、現在では周辺を市街地が囲み、孤立化が著しい。そのため、東谷山地域に比較して、森林性の強い種や生息に広い面積を必要とする大型種の存続は難しいと考えられる。ただし、小型で移動能力が低いモグラ類、ネズミ類や市街地にも進出したタヌキにとっては、これらの孤立した緑地が現在の主要な生息場所となっている。また最近では、市内で分布を広げつつあるアカギツネもごくわずかだが確認されるようになった。さらに、ごくまれではあるが、ニホンザルやイノシシの目撃例、捕獲例も知られている。これらは他地域からの分散個体であると考えられ、現在、孤立した緑地での繁殖、定着はほとんど進んでいないと推測される。しかし、今後の展開によっては、これまで確認されていない場所にも定着する可能性があり、注視が必要である。その他、市東部の南側、豊明市との市境付近では、樹林に囲まれた個人の農地で、市内では31年ぶりとなるニホンアナグマの生息が確認された。この農地は愛知用水沿いにある風致地区で、比較的里山の景観が残されている地域ではあるが、すでに周辺まで宅地が迫っており、今後の存続が危ぶまれる。

外来のアライグマやハクビシン、シベリアイタチについては、すでに市東部の孤立した緑地でも確認されている。これらの外来哺乳類は、緑地内に生き残る様々な在来生物に影響を与えていると推測される。特にアライグマについては、両生類やニホンイシガメといった水辺の生物に対する食害が懸念される。また、これらの外来哺乳類は周辺の市街地にも進出し、家屋への侵入や糞尿による被害等を引き起こしている。その他、東部地域のため池や河川では外来種のヌートリアが繁殖、定着している。

中央部地域（洪積台地）

都市域の中央部地域で規模の大きい緑地が残っているのは、熱田神宮および名古屋城である。この内、熱田神宮にはタヌキと外来種のハクビシンが生息する。名古屋城とその周辺にはコウベモグラとタヌキ、外来種のヌートリアとハクビシンが生息する。特に名古屋城の外堀は、日常的な人の侵入がほとんどないため、タヌキやコウベモグラの好適な生息場所となっている。

名古屋城の水堀にはヌートリアが生息し、岸辺にトンネル状の巣を作っている。この水堀では、希少な水生植物のオニバスが20年ぶりに確認されたが、オニバスが生育している場所のすぐ近くにヌートリアが営巣しているため、オニバスへの食害が懸念される。ヌートリアについては市の中心部を流れる堀川でも生息が確認されている。

最近、新たに名古屋城とその周辺でオヒキコウモリの生息が確認された。名古屋城の石垣をねぐらとして利用している可能性もあるが、現在までねぐらは確認されていない。オヒキコウモリは長距離飛行も可能であることから、採餌のために市外から飛翔してくる可能性も残されている。

外来種については都市部を含む中央部地域においても、ヌートリアの他にアライグマ、ハクビシン、シベリアイタチが確認されている。これら3種の外来種は、周辺に緑地がほとんど見られない市街地にも進出しており、家屋や軒下、排管内といった人工物をねぐらとし、放置ゴミやペットの餌など人為的なものも含めて様々な食物を採食しているものと推測される。東部地域と同様、家屋への侵入や糞尿による被害が見られる。

西部地域（沖積平野）

西部地域は樹林地が少ないため、森林に強く依存した種を欠くが、その代わりに農地や河川敷の緑地が広がり、その一帯が哺乳類の生息場所となっている。庄内川下流域の河川敷に広がる土壌堆積地にはコウベモグラが生息し、高茎草地にはカヤネズミやアカネズミが生息する。河川敷に残されたこのような自然環境は、近年、河川の改修工事等によって、消失、分断され、縮小、孤立化する傾向にあるが、それでも、タヌキなどの中型哺乳類は頻繁に利用しており、最近ではアカギツネの進出も確認されるようになった。アカギツネが西部地域に定着しているかどうか明らかではないが、庄内川沿いを回廊として上流域から移動してきた可能性がある。

その他、西部地域でも、外来種のヌートリア、ハクビシン、シベリアイタチ、アライグマが確認されている。また、今回の目録には記載していないが、アムールハリネズミ、カイウサギ（アナウサギの家畜品種）が西部地域で見つかっている。アムールハリネズミについては1個体が拾得されたのみで繁殖は確認されていない。カイウサギについては庄内川の河川敷で繁殖も確認されているが、その後、定着はしていないようである。

名古屋港（沿岸海域）

名古屋港には海生哺乳類であるスナメリが生息している。名古屋港は大型の船舶が行き来する日本の主要な貿易港の一つであり、都市河川が流入する地域である。沿岸性が強い本種にとって、人間活動の与える影響が懸念されるが、これまで湾内でのスナメリの詳細な情報はなかった。2011年より名古屋港水族館による湾内でのスナメリ調査がはじまり、その実態が明らかにされつつある。

② 名古屋市における絶滅危惧種の概況

今回、レッドリストに掲載した種は、絶滅（EX）2種、絶滅危惧ⅠA類（CR）11種、絶滅危惧ⅠB類（EN）2種、絶滅危惧Ⅱ類（VU）2種、準絶滅危惧（NT）2種、情報不足（DD）3種の計22種である。この内、2010年補遺版と比較してランクが変更になった種を以下に示す。

前回、絶滅（EX）の扱いであったイノシシは、今回、東谷山地域を中心に生息していることが明らかとなったため、絶滅（EX）から情報不足（DD）へと変更した。家畜ブタ品種との交雑の可能性や、最近、天白区や緑区などで散発的に確認されている個体の由来など不明な点が多く、今後、DNA分析などによって確認していく必要があるだろう。

絶滅危惧ⅠA類（CR）は、前回の8種から3種類が新たに加わり合計11種となった。この内、ニホンジネズミとハタネズミについては、前回、絶滅危惧ⅠB類（EN）の扱いであったが、この2種は最近の確認例がほとんどないこと、確認場所が非常に局所的で分布が小地域に偏在するため、小規模の開発でも生息地の消失するおそれがあることなどを理由に絶滅危惧ⅠA類（CR）に変更した。

前回、絶滅危惧Ⅱ類であったニホンイタチについては、これまで外来種であるシベリアイタチと混同されていることが多く、市内での分布状況は明らかではなかった。しかし、今回、アライグマ防除捕獲における混獲個体やへい死した個体などの分析により、市内の市街地から緑地まで広く分布する種は、ほとんどがシベリアイタチであることが明らかとなった。これに対し、ニホンイタチは東谷山地域で確認された1個体のみであった。これらのことから、市内でのニホンイタチの分布はすでに局所的で個体数も少なく、また、競争種であるシベリアイタチとの関係から、今後の個体数の回復や分布の拡大は困難であると推測され、ランクを絶滅危惧ⅠA類（CR）に変更した。

オヒキコウモリについては、これまで市内での確認例はまったくなく、名古屋市レッドリスト未記載種であったが、2011年10月に中区丸の内ですべて衰弱した個体が1個体され、さらに、2014年には名古屋城敷地内でオヒキコウモリの発するエコーロケーションコールが多数確認された。ただし、市内でのねぐらが現在まで確認されていないこと、名古屋城とその周辺以外では、東谷山地域の蛭池周辺でしか確認できていないことから、今回のレッドリストでは情報不足（DD）として記載した。

（執筆者 野呂達哉）

③ レッドリスト掲載種の解説

レッドリストに掲載された各哺乳類について、種ごとに形態的な特徴や分布、市内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。準絶滅危惧種、情報不足種についても、絶滅危惧種と同じ様式で記述した。なお、この記載については、平成26年11月現在のデータに基づくものである。

【掲載種の解説（哺乳類）に関する凡例】

【分類群名等】

対象種の本調査における分類群名、分類上の位置を示す目名、科名を各頁左上に記述した。目、科、種の配列は原則として「The Wild Mammals of Japan」(SHOUKADOH Book Sellers, 2009)、「日本の哺乳類〔改訂2版〕」(東海大学出版会, 2008)に準拠した。

【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。和名及び学名は、原則として「The Wild Mammals of Japan」(SHOUKADOH Book Sellers, 2009)に準拠した。その他、「日本の哺乳類〔改訂2版〕」(東海大学出版会, 2008)を参照した。

【カテゴリー】

対象種の名古屋市におけるカテゴリーを各頁右上の枠内に記述した。参考として「第三次レッドリスト レッドリストあいち 2015」(愛知県, 2015)の愛知県での評価区分、及び「レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物- 1 哺乳類」(環境省, 2014)の全国でのカテゴリーも併記した。

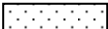

【選定理由】

対象種を名古屋市版レッドデータブック掲載種として選定された理由について記述した。

【形態】

対象種の形態の概要を記述し、一部の種については写真を掲載した。

【分布の概要】

対象種の分布状況を記述した。また、本調査において対象種の生息が現地調査及び文献調査によって確認された地域について、各区ごとに着色して市内分布図として掲載した。ただし、絶滅と判断された区域は  で示した。また、目撃情報のみの場合は  で示した。

【生息地の環境／生態的特性】

対象種の生息環境及び生態的特性について記述した。

【現在の生息状況／減少の要因】

対象種の名古屋市における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

【特記事項】

以上の項目で記述できなかった事項について補足説明した。

【引用文献】

記述中に引用した文献を、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

【関連文献】

対象種の関連する文献のうち代表的なものを、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

哺乳類 <食肉(ネコ)目 イヌ科>

オオカミ *Canis lupus* Linnaeus

【選定理由】

北海道産は 1800 年代末の毛皮取引記録以降、本州以南産は 1905 年に奈良県で捕獲されて以降、ともに生息記録がない。市内では少なくとも明治以降に生息記録はない。

カテゴリー

名古屋市 2015	絶滅
愛知県 2015	絶滅
環境省 2014	絶滅

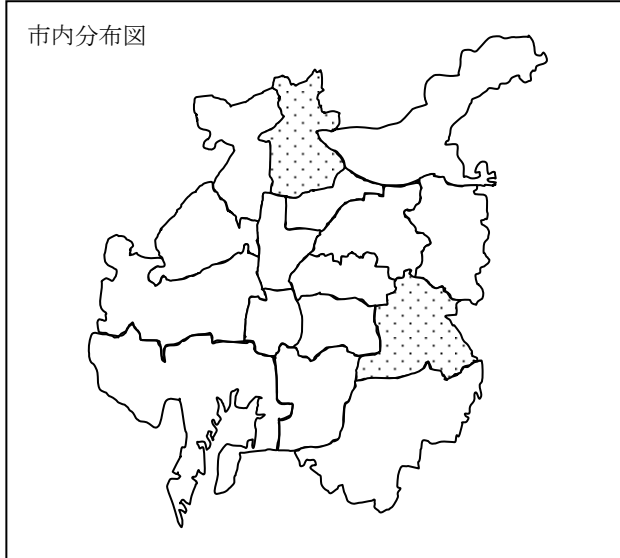
【形態】

標本から測定された頭胴長は、本州産で 95~115cm、北海道産で 120~130cm、体重は不明である。ほぼ大型のイヌの大きさに近い。オオカミ生息当時のイヌよりも大型で、頭骨の額部分のへこみが少なく、裂肉歯が大きいことからイヌとは区別される。

【分布の概要】

【市内の分布】

朝日重章(1718年没)の「鸚鵡籠中記」(名古屋市教育委員会編, 1965~1969)には、1693年頃に現在の天白区平針付近、1709年頃に現在の北区味鋤、1717年頃に市内での生息を示唆する記述が残されているが、明治以降の生息記録はない。



【県内の分布】

遺骨化石が縄文時代の伊川津貝塚(豊川市小坂井町)などから出土している(西本, 1988)。近世でも 1695 年頃の知多半島(ヤマノイヌと記述)、1709 年頃の江南市その他、犬山市、旧春日井郡、額田郡などで文献史料が残されている(名古屋市教育委員会編, 1965~1969)。

【国内の分布】

北海道産は 1800 年代末以降、本州以南産は 1905 年以降、生息記録がない(平岩, 1981)。

【世界の分布】

ユーラシア大陸や北米大陸など、主に北半球に生息する。

【生息地の環境／生態的特性】

家族単位で群れを作り、数十 km² の行動圏を持つ。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

北海道産は毛皮や肉を得る目的や害獣として捕獲され、さらにイヌとの共通感染症の流行や豪雪によりエゾシカなどが減少し、食物が不足したことから絶滅したと考えられている。本州以南でも同様に狩猟や害獣駆除、さらに感染症などにより絶滅したと考えられている(平岩, 1981; 千葉, 1995)。

【保全上の留意点】

絶滅種であり、生息を維持できる広範な生息地は保証されていない。

【引用文献】

千葉徳爾, 1995. オオカミはなぜ消えたか - 日本人と獣の話 -, 279pp. 新人物往来社, 東京.
 平岩米吉, 1981. 狼 - その生態と歴史 -, 308pp. 池田書店, 東京.
 名古屋市教育委員会(編), 1965~1969. 名古屋叢書続編 9~12 巻. 名古屋市教育委員会.
 西本豊弘, 1988. 動物遺体. 伊川津遺跡 - 渥美町埋蔵文化財調査報告書 4 -, pp.269-272. 渥美町教育委員会.

【関連文献】

Endo, H., 2009. *Canis lupus* Linnaeus, 1758. In: S. D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (ed.), *The Wild Mammals of Japan*, pp.218-219. SHOUKADOH Book Sellers, Kyoto.
 子安和弘・織田銃一, 2009. オオカミ. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009 動物編, pp.65. 愛知県環境部自然環境課.
 名和 明, 2008. 哺乳類. 新修名古屋市史資料編自然(新修名古屋市史資料編編集委員会編), pp.315-322. 名古屋市.
 織田銃一・子安和弘, 2010. オオカミ. 名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックなごや 2010 - 2004 年版補遺 -, pp.73. 名古屋市環境局環境都市推進部生物多様性企画室.

(執筆者 名和 明・野呂達哉)

哺乳類 <偶蹄(ウシ)目 シカ科>

ニホンジカ *Cervus nippon* Temminck

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

江戸時代には市内に生息していたことがわかっているが、最近50年以上にわたり野生個体が生息しているという信頼に足る情報はない。

【形態】

国内の亜種ごとに大きさは異なるが、雄で頭胴長が90~190cm、体重が50~130kg、雌で頭胴長が90~150cm、体重が25~80kgである。雄は雌よりも大きい。雄のみ毎年生えかわる角を持つ。毛色は茶から灰褐色、尻は白色で、全体に白斑が混じることが多い。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区、名東区、千種区ではかつて鹿狩りが行われていたが、現在は生息していない。

【県内の分布】

豊橋市、岡崎市、豊川市、豊田市、蒲郡市、新城市、設楽町、東栄町、豊根村など尾張地域東部や三河地域。

【国内の分布】

本州、四国、九州やその周辺の島嶼。

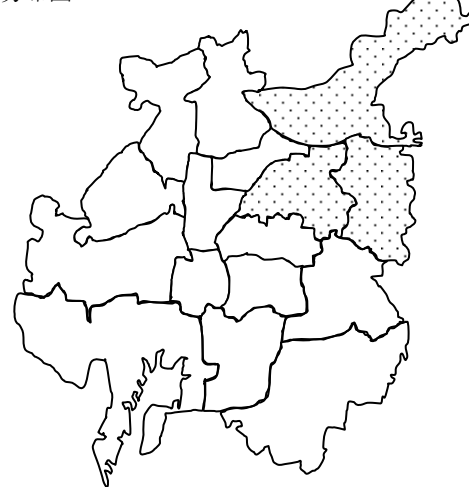
【世界の分布】

ベトナムから極東アジアにかけて広く分布。

【生息地の環境／生態的特性】

森林およびその林縁部で生息する。植物食性で草本から木本まで幅広く採食する。群れ生活を営むが、通常雌雄は別々の群れをつくる。発情期は秋で、この時期だけ雄はなわばりをつくる。多積雪の環境では生息が難しいが、近年の暖冬傾向で全国的に個体数が増加している。

市内分布図

**【過去の生息状況／絶滅の要因】**

古くは、平手町遺跡(北区)などから骨が出土している(渡辺ほか, 2002)。イノシシやシカの骨遺物は市内ほとんどの貝塚から出土している(安達, 1997)。江戸時代には、藩士による狩猟や農作物を食害から守る鹿垣の記録が残されている(名古屋市教育委員会編, 1964; 名古屋市教育委員会編, 1966)。これらのことから、かつては市内に本種が生息していたことがわかる。

1995年11月に名東区で雌成獣個体が捕獲されたが、飼育個体とされている(中日新聞1995年11月24日)。市周辺地域では、個体数の増加、分布の拡大が顕著で、農作物などへの被害が発生している。現在の分布は、市外東部から市内に近づいており、十分注視すべき状況といえる。

【保全上の留意点】

市内では絶滅種であるが、周辺地域では絶滅の危険を示す兆候はない。市内に侵入した場合、生態系や農作物への被害、交通事故による車両や人への被害の発生が懸念される。

【特記事項】

愛知県では特定鳥獣保護管理計画の対象種となっている。

【引用文献】

安達厚三, 1997. 縄文人の暮らし. 新修名古屋市史第一巻(新修名古屋市史編集委員会編), pp.111. 名古屋市.
三浦慎吾, 2008. ニホンジカ. 日本の哺乳類[改訂2版](自然環境研究センター編), pp.110-111. 東海大学出版会, 秦野.
Nagata, J., 2009. *Cervus nippon* Temminck, 1838. In: S. D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (ed.), The Wild Mammals of Japan, pp.296-298. SHOUKADOH Book Sellers, Kyoto.
名古屋市教育委員会(編), 1964. 名古屋叢書続編第1巻(寛文村々覚書上), pp.257. 名古屋市教育委員会
名古屋市教育委員会(編), 1966. 名古屋叢書続編第3巻(寛文村々覚書上), pp.445. 名古屋市教育委員会
渡辺 誠・岡田 賢・李 浩基・築瀬孝延, 2002. 西志賀遺跡の自然遺物. 平手町遺跡, pp.61. 愛知県埋蔵文化財センター.

【関連文献】

愛知県環境部自然環境課, 2012. 特定鳥獣保護管理計画(ニホンジカ), 33pp. 愛知県環境部自然環境課.
名和 明, 2008. 哺乳類. 新修名古屋市史資料編自然(新修名古屋市史資料編編集委員会編), pp.315-322. 名古屋市.
高槻成紀, 2006. シカの生態誌. 480pp. 東京大学出版, 東京.

(執筆 名和 明・野呂達哉)

哺乳類 <トガリネズミ目 トガリネズミ科>

ニホンジネズミ *Crocidura dsinezumi* (Temminck)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

市内での確認場所は極めて局所的で、攪乱されやすい環境にあるため、小規模の開発でも個体群消失のおそれがある。最近10年間の市内での確実な記録は確認できなかった。

【形態】

体毛の色は灰色。尾には全面を覆う短毛と基半部にまばらな長毛がある。頭胴長 61～84mm、尾長 39～60mm、体重 5～12.5g。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区（吉根、川）、名東区（牧野ヶ池緑地）、緑区（大高町中之瀬）。

【県内の分布】

豊根村、設楽町、豊田市、新城市、豊川市、一色町佐久島、みよし市、犬山市、春日井市、瀬戸市、日進市、豊明市、名古屋市、知多市、安城市。

【国内の分布】

北海道（移入分布の可能性ある）、本州、四国、九州、隠岐諸島、佐渡島、伊豆諸島（新島）、種子島、屋久島、福岡県沖の島、トカラ列島（中之島）など。

【世界の分布】

韓国済州島（移入分布の可能性ある）。

【生息地の環境／生態的特性】

地表面や落葉層で活動し、下層植生が密に生える藪など、餌となるクモ類やジムカデ類が豊富な場所を好む。ネコが捕えるが食べることは少ない（宮尾ほか、1984）。

【現在の生息状況／減少の要因】

過去に確認された場所の一部は開発によって消失した（緑区大高町中之瀬）。最近、緑区との境界に近い豊明市沓掛町切山台で生息が確認されたことから、現在でも市内に生息している可能性は高い。

【保全上の留意点】

河川敷や農地周辺に残された草地のように攪乱されやすい環境に生息するため、そのような環境を残していく配慮が必要である。

【特記事項】

愛知県のレッドリストでは、佐久島の個体群が保全のために配慮が必要と考えられる特徴的な個体群（地域個体群）として記載されている。

【引用文献】

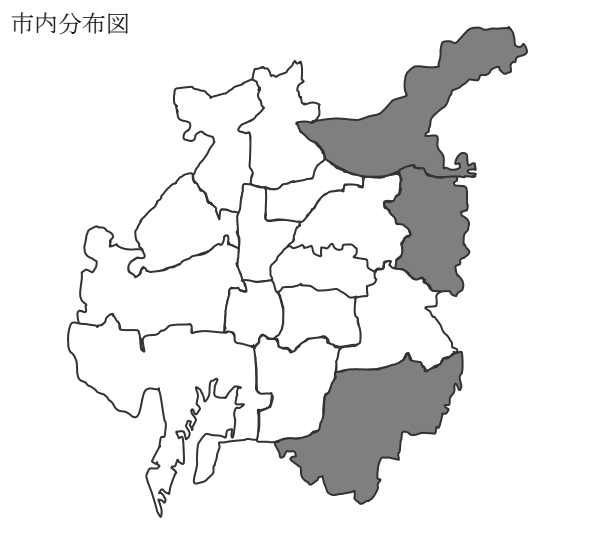
宮尾嶽雄・花村 肇・高田靖司・酒井英一、1984. 1. ジネズミ. 愛知の動物（佐藤正孝・安藤尚編），pp.287-288. 愛知県郷土資料刊行会，名古屋。

【関連文献】

阿部 永，2008. ニホンジネズミ. 日本の哺乳類 [改訂2版]（自然環境研究センター編），p.14. 東海大学出版会，秦野。
 子安和弘・織田銃一，2009. ニホンジネズミ. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち2009動物編，p.90. 愛知県環境部自然環境課。
 Motokawa, M., 2009. *Crocidura dsinezumi* (Temminck, 1842). In: S. D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (ed.), *The Wild Mammals of Japan*, pp.22-23. SHOUKADOH Book Sellers, Kyoto.
 高田靖司，2004. ジネズミ. 名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックなごや2004動物編，p.37. 名古屋市環境局環境都市推進部環境影響評価室。



ニホンジネズミ
豊明市沓掛町切山台、2013年1月29日、野呂達哉 撮影



市内分布図

（執筆者 野呂達哉）

哺乳類 <翼手(コウモリ)目 キクガシラコウモリ科>

キクガシラコウモリ *Rhinolophus ferrumequinum* (Schreber)

【選定理由】

市内では洞穴性の本種が利用できる自然の洞穴は少なく、廃坑、防空壕跡といった人工洞穴も、近年、入口が塞がれる傾向にある。本種がねぐらとして利用できる環境は減少する一方であり、回復は見込めない。

【形態】

鼻の周囲に鼻葉と呼ばれる葉状の突起を持つ。幅が広く短い翼を持ち、森林内での採餌に適している。体色は褐色。前腕長 56～65mm、頭胴長 63～82mm、尾長 28～45mm、体重 17～35g。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区(竜泉寺、上志段味東谷)。

【県内の分布】

豊根村、設楽町、東栄町、豊田市、新城市、豊橋市、田原市、幸田町、西尾市、名古屋市、瀬戸市、犬山市。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、伊豆大島、三宅島、新島、佐渡島、隠岐、対馬、壱岐島、対馬、五島、屋久島、口之島、中ノ島。

【世界の分布】

南ヨーロッパから北アフリカ、北インド、中国、韓国、日本。

【生息地の環境／生態的特性】

ねぐらは主に洞穴だが、自然の洞穴だけではなく、廃坑、防空壕跡、廃屋といった人工的環境も利用する。採餌活動は河川、平地、小丘陵、森林や草原などで行われる。

【現在の生息状況／減少の要因】

ねぐらがある守山区竜泉寺の防空壕跡は入口が土砂で埋まり、現在では利用されていないようである。市内での活動場所はほとんど分かっていないが、最近、東谷山地域の太村池周辺(守山区上志段味東谷)で本種のエコーロケーションコールを確認した。

【保全上の留意点】

ねぐらが見つかった場合、その保全に留意する必要がある。人の出入りの制限、またはコウモリ類が通過可能な柵(バット・ゲート)を設置することが有効である。

【特記事項】

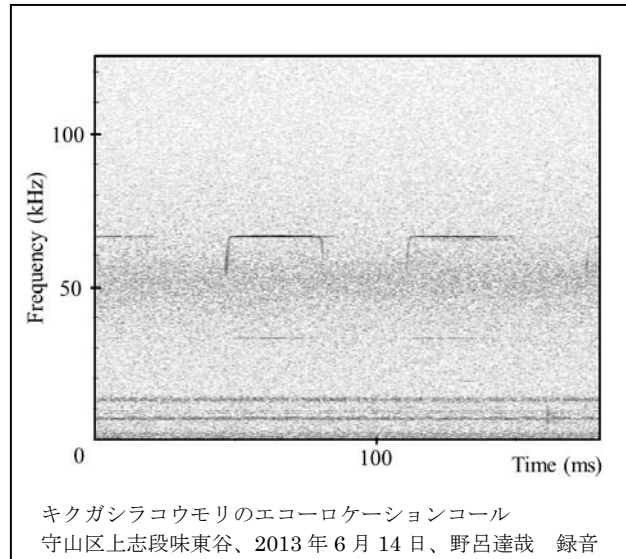
市内生息域である守山区北東部と 6km ほどの距離にある愛岐トンネル群(岐阜県多治見市)では、本種の生息が多数確認されている(多治見市、平成 25 年度第 1 回文化財審議会議事録)。

【関連文献】

子安和弘・織田銃一, 2009. キクガシラコウモリ. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009 動物編, p.86. 愛知県環境部自然環境課.
 前田喜四雄, 2008. キクガシラコウモリ. 日本の哺乳類 [改訂 2 版] (自然環境研究センター編), p.30. 東海大学出版会, 秦野.
 佐野 明, 2011. キクガシラコウモリ. コウモリ識別ハンドブック改訂版 (コウモリの会編), pp.18-19. 文一総合出版, 東京.
 高田靖司, 2004. キクガシラコウモリ. 名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックなごや 2004 動物編, p.27. 名古屋環境局環境都市推進部環境影響評価室.

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧 I A 類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外



(執筆者 野呂達哉)

哺乳類

哺乳類 <齧歯(ネズミ)目 キヌゲネズミ科>

ハタネズミ *Microtus montebelli* (Milne-Edwards)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧 I A類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【選定理由】

市街化によって農地や河川敷周辺に残された生息地が消失、減少した。これまでに市内で確認された場所は局所的で、小地域に偏在するため、小規模の開発でも生息場所が消失するおそれがある。最近10年間の市内での記録は確認できなかった。

【形態】

背面は茶褐色、腹面は灰白色。鼻先は丸くずんぐりとした体形で尾は短い。頭胴長 95～136mm、尾長 29～50mm、後足長 16.5～20.4mm、体重 22～62g、乳頭式は 2+0+2=8。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区庄内川河川敷(川、吉根、竜泉寺、幸心)と矢田川河川敷(大森)、名東区(猪高町猪子石)。

【県内の分布】

豊根村、豊田市、設楽町、田原市、みよし市、幸田町、西尾市、犬山市、名古屋市、知多市、江南市、北名古屋市、愛西市、春日井市、豊川市、稲沢市、東浦町、安城市。

【国内の分布】

本州、九州、佐渡島、能登島。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

地下に入り組んだトンネルシステムを作り生活している。農地や河川敷などの草地的環境を主な生息場所としている。土壌層の豊かな草地で優占し、森林化とともに生息数が減少する(宮尾ほか, 1974)。草食性が強く、野生の草本だけではなく、農作物も採食する。

【現在の生息状況／減少の要因】

東日本では決して稀な種ではないが、中部以西では減少傾向にある。河川敷や農地周辺に残された生息適地が減少したため、分布は局所的である。

【保全上の留意点】

河川敷や農地周辺に残された草地のように攪乱されやすい環境に生息するため、そのような環境を残していく配慮が必要である。

【引用文献】

宮尾嶽雄・両角徹郎・両角源美, 1974. 霧ヶ峰・白樺湖高原の小哺乳類相. 哺乳動物学雑誌, 6(1): 33-38.

【関連文献】

愛知学院大学歯学部第二解剖学教室, 1985. 小哺乳類の採集記録 第1集(1978～1984年), 67pp. 愛知学院大学歯学部第二解剖学教室.

金子之史, 1975. 日本の哺乳類(12) げっ歯目 ハタネズミ属. 哺乳類科学, 30: 3-26.

子安和弘・織田銃一, 2009. ハタネズミ. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち2009動物編, p.35.

愛知県環境部自然環境課.

宮尾嶽雄・花村 肇・高田靖司・酒井英一, 1984. 7. ハタネズミ. 愛知の動物(佐藤正孝・安藤尚編), pp.296-297. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.

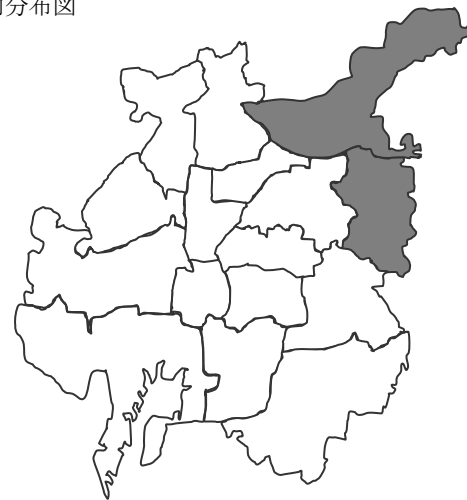
名和 明, 2008. 新修名古屋市史資料編自然目録(新修名古屋市史資料編編集委員会編), 222pp. 名古屋市.

高田靖司, 2004. ハタネズミ. 名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックなごや2004動物編, pp.35. 名古屋市環境局環境都市推進部環境影響評価室.



ハタネズミ、
豊田市樽俣町、2006年12月17日、野呂達哉 撮影

市内分布図



(執筆者 野呂達哉)

哺乳類 <齧歯(ネズミ)目 リス科>

ニホンリス *Sciurus lis* Temminck

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【選定理由】

市内では市街化にともない森林が減少し、生息地が孤立化している。さらに食物となる堅果などを供給するナラ類やマツ類の枯死が続き、生息状況が悪化している。

【形態】

本種の毛色は、背面が褐色で腹面が白色。全面が灰から赤褐色のクリハラリスや、背面に黒色の縞模様のあるシマリスと区別できる。体重は 250～310g、頭胴長は 160～220mm、尾長は 130～170mm。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区の東谷山や森林公園、小幡緑地、八竜緑地など限られた地域に生息している。

【県内の分布】

尾張東部や三河地域の山間地域に分布する。

【国内の分布】

本州・四国に分布しているが、中国地方以西の本州では生息地が限定的になっている。狩猟など生息記録のあった九州では、過去100年間にわたり生息が確認されていない。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

低地から亜高山帯までの広葉樹林、針広混交林やマツ林などに生息する。樹上に球形の巣を作る。主に果実、堅果、花、キノコ類などを食べるが、昆虫なども採食する。春から夏にかけて年に1～2回の繁殖を行う。1回の産仔数は2～6頭である。

【現在の生息状況／減少の要因】

森林が残る守山区のわずかな地域に生息しているが、その範囲は狭く、道路網などにより分断されつつある。ナラ枯れやマツ枯れに起因する食物量の減少も生息状況を悪化させる要因となっている。

【保全上の留意点】

現在の生息地の保全はもちろんのこと、生息地の連続性を維持する必要がある。道路網の整備にはその分断を回避するか、代償となる施設(アニマルパスウェイ)が必要である。現在、著しく減少しているナラ類やマツ類の更新が可能な森づくりも必要である。

【特記事項】

かつて緑区などにも生息の情報があったが、現在は確実な生息記録がない。ペット等が由来のクリハラリスなど近縁の外来種の放逐がないように注意が必要である。

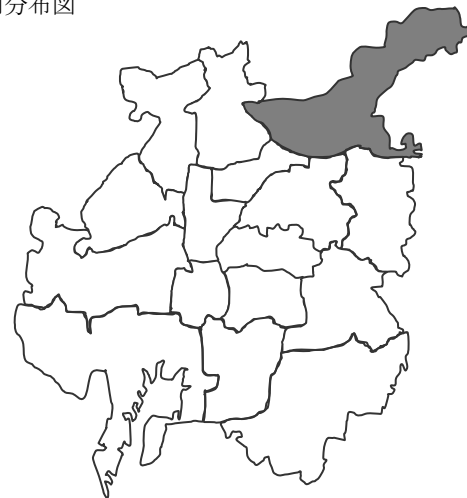
【関連文献】

- 環境省(編), 2014. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-1 哺乳類, 132pp. ぎょうせい, 東京.
 名和 明, 2008. 哺乳類. 新修名古屋市史資料編自然(新修名古屋市史資料編編集委員会編), pp.315-322. 名古屋市.
 高田靖司, 2004. ニホンリス. 名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックなごや2004動物編, p.29. 名古屋市環境局環境都市推進部環境影響評価室.
 Tamura, N., 2009. *Sciurus lis* Temminck, 1844. In: S. D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (ed.), The Wild Mammals of Japan, pp.186-187. SHOUKADOH Book Sellers, Kyoto.
 田村典子, 2011. リスの生態学, 211pp. 東京大学出版会, 東京.



ニホンリス
守山区東谷山、2010年8月18日、名和 明 撮影

市内分布図



(執筆者 名和 明)

哺乳類 <齧歯(ネズミ)目 リス科>

ムササビ *Petaurista leucogenys* (Temminck)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【選定理由】

市内では市街化にともない森林面積が縮小し、生息地が孤立化している。巣穴を作るための大径木の減少や食物となる堅果などを供給するナラ類やマツ類の枯死が続き、生息状況が悪化している。

【形態】

毛色は背面が褐色で、腹面が白色。顔面の目と耳の間から頬にかけて白色のラインがある。前後肢間に、滑空ができる飛膜を持つ。頭胴長は 27~49cm、尾長は 28~41cm、体重は 495~1250g。国内の齧歯類としては最大級である。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区(東谷山)。

【県内の分布】

尾張東部や三河地域の山間地域に分布。

【国内の分布】

本州、四国、九州に分布。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

常緑樹林や針広混交林を主な生息地とする。植物食性で主に葉、果実や種子などを採食する。大径木の樹洞などを利用して巣穴とする。夜行性で夕刻以降に巣を出て採食する。生活のほとんどを樹上で行う。年 2 回発情し、1 回の産仔数はふつう 1~2 頭である。

【現在の生息状況／減少の要因】

大径木のわずかに残る東谷山の森林に生息しているが、その範囲は狭く道路網などにより分断されつつある。ナラ枯れやマツ枯れに起因する食物量の減少も生息状況を悪化させる要因である。県内ではスギなどの大径木が残る社寺林で見られる事が多いが、市内では連続した森林に連なる社寺林がなくなっている。

【保全上の留意点】

現在の生息地の保全はもちろんのこと、生息地の連続性を維持する必要がある。特に生息地での伐採は、たとえば本種の巣穴がない樹木でも控える必要がある。

【特記事項】

過去には優良な毛皮のため狩猟獣となっていたが、現在は非狩猟獣である。

熱田区玉の井町の玉ノ井遺跡(縄文~弥生)からは、本種の歯が出土している(新美, 2003)。

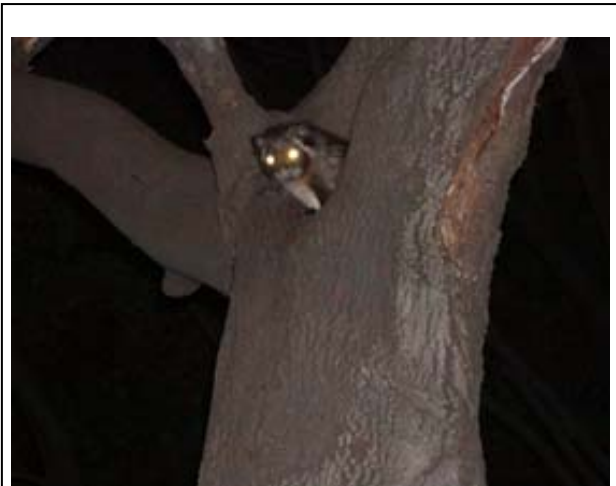
【引用文献】

新美倫子, 2003. 玉ノ井遺跡第3次調査出土の動物遺体. 埋蔵文化財調査報告 44, pp.157-158. 名古屋市教育委員会.

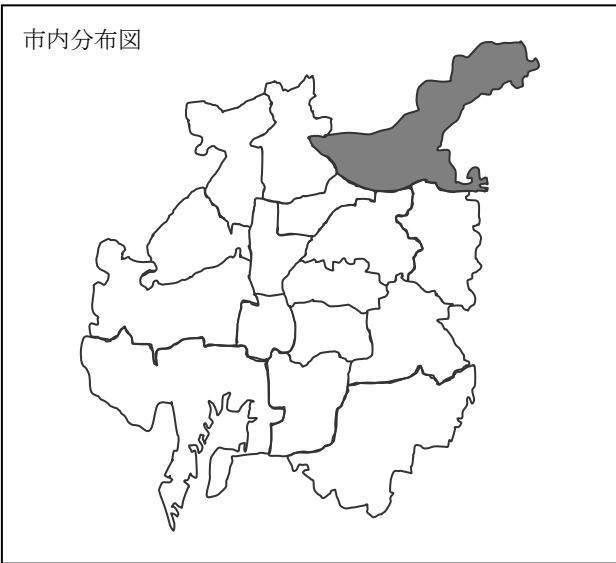
【関連文献】

環境省(編), 2014. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-1 哺乳類, 132pp. ぎょうせい, 東京.
子安和弘・織田鉄一, 2009. ムササビ. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009 動物編, p.81.
愛知県環境部自然環境課.

Oshida, M., 2009. *Petaurista leucogenys* (Temminck, 1827). In: S. D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (ed.), *The Wild Mammals of Japan*, pp.192-193. SHOUKADOH Book Sellers, Kyoto.



ムササビ
守山区東谷山、2003年12月30日、名和 明 撮影



(執筆者 名和 明)

哺乳類 <ウサギ目 ウサギ科>

ニホンノウサギ *Lepus brachyurus* Temminck

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【選定理由】

市内でも1940年代までは東部丘陵地などで普通に生息していたが、近年は個体数が急激に減少している。生息分布もきわめて限られている。2000年代に入ってからは守山区（東谷山）で確認されているにすぎない。

【形態】

積雪地域では、毛色は無積雪期が茶色、積雪期は白色に変化するが、市内産は一年を通して茶色のようなものである。頭胴長は45～54cm、尾長は2～5cm、体重は2.1～2.6kg。市内には人為的に放逐されたカイウサギ（アナウサギの家畜品種）がみられることがあるが、大きさや毛色などが異なる。

【分布の概要】

【市内の分布】

最近の確実な記録は守山区（東谷山）のみである。かつては、名東区、千種区、天白区、緑区でも確認されているが、最近の生息情報はまったくない。

【県内の分布】

三河地区や市に接する春日井市や瀬戸市など尾張東部に分布する。

【国内の分布】

本州、四国、九州およびその周辺の島嶼。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

低地から亜高山帯、森林から草原まで様々な環境に生息する。植物食で春から夏にかけて出産し、1回で1～4頭の子を出産する。

【現在の生息状況／減少の要因】

宅地化や道路建設などが要因で生息地が分断され、個体数が減少した可能性がある。東部丘陵に残存している可能性もあるが、その生息地は孤立、隔離されていると推測される。

【保全上の留意点】

少なくとも現在生息する環境を保全し、分布を分断しないようにする必要がある。

【特記事項】

1940～1970年代には千種区名古屋大学周辺でウサギ狩りが行われていた。1980年代には名東区（明德池、塚ノ杵池）、守山区（中志段味、吉根、竜泉寺）、緑区（滝ノ水）、天白区（島田緑地）での生息が確認されている（高田，2002）。

【引用文献】

高田靖司，2002. 守山と春日井の哺乳類. 私たちの博物館 - 志段味の自然と歴史を訪ねて -, 62:1-5.

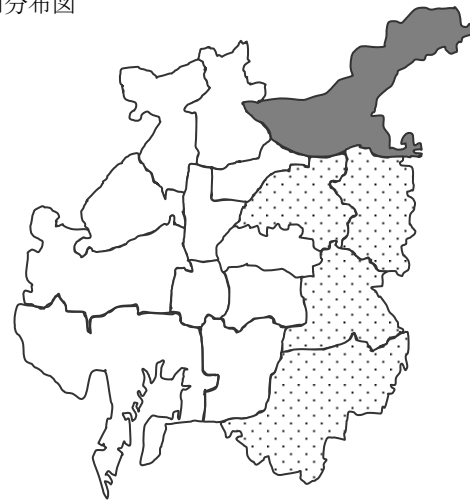
【関連文献】

石井信夫，2008. ニホンノウサギ. 日本の哺乳類 [改訂2版] (自然環境研究センター編), p.151. 東海大学出版会, 秦野.
 名和 明，2008. 哺乳類. 新修名古屋市史資料編自然 (新修名古屋市史資料編編集委員会編), pp.315-322. 名古屋市.
 Yamada, F., 2009. *Lepus brachyurus* Temminck. In: S. D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (ed.), *The Wild Mammals of Japan*, pp.208-209. SHOUKADOH Book Sellers, Kyoto.
 高田靖司，2004. ノウサギ. 名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックなごや2004動物編, p.28. 名古屋市環境局環境都市推進部環境影響評価室.



ニホンノウサギ
守山区東谷山、2007年8月、名和 明 撮影

市内分布図



(執筆 名和 明・野呂達哉)

哺乳類 <食肉(ネコ)目 イヌ科>

アカギツネ *Vulpes vulpes* (Linnaeus)

【選定理由】

市内ではこれまで市北東部が分布の中心であったが、最近、東部地域の孤立した緑地や市西部でも確認されるようになった。ただし、進出した地域での繁殖、定着が進んでいるかは不明で、未だ予断を許さない状況である。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧IA類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

背面は赤褐色で、顎の下から腹部にかけては白色。足先前面には黒い毛が混じる。耳は大きく先が尖る。頭胴長 60~75cm、尾長 40cm、体重 4~7kg。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区(東谷山、上志段味、中志段味、吉根、小幡緑地本園、川東山、大森、川西など)、名東区(猪高緑地)、天白区(野並など)、緑区(鳴海町大清水)、北区(成願寺町北野など)、中川区(富田町万場など)。

【県内の分布】

東三河北部から南部にかけては全域で確認されている。尾張地域では北部から東部にかけて確認されているが、西部においては未確認の地域もある。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

ユーラシアの大部分と北アメリカに分布。オーストラリアには移入個体群が生息する。

【生息地の環境／生態的特性】

田畑や草地、森林、集落地域などがモザイク状に分布する多様な環境を選択的に利用する(中園, 1989)。生息条件として、餌となるネズミ類や昆虫などが豊富で、巣作り、子育てのできる環境があることが重要である。

【現在の生息状況／減少の要因】

市街化に伴う樹林地や草地、農地の縮小によって、本種の繁殖、定着できる場所は著しく減少した。最近、東部地域の孤立した緑地や都市域の市西部に進出する個体が見つかっている(野呂, 2014)。今後、都市動物化に向かうのか注目する必要がある(名和, 2008)。

【保全上の留意点】

生息適地の保全とともに河川沿いの樹林地や草地、緑地帯といった生息地間の繋がりを支える環境を保全していく必要がある。

【引用文献】

中園敏之, 1989. 九州におけるホンドキツネのハビタット利用パターン. 哺乳類科学, 29(1): 51-62.
 名和 明, 2008. キツネ. 新修名古屋市史資料編自然(新修名古屋市史資料編編集委員会編), p.318. 名古屋市.
 野呂達哉, 2014. 名古屋市のアカギツネその後. 生きものシンフォニー12号. なごや生物多様性センター.

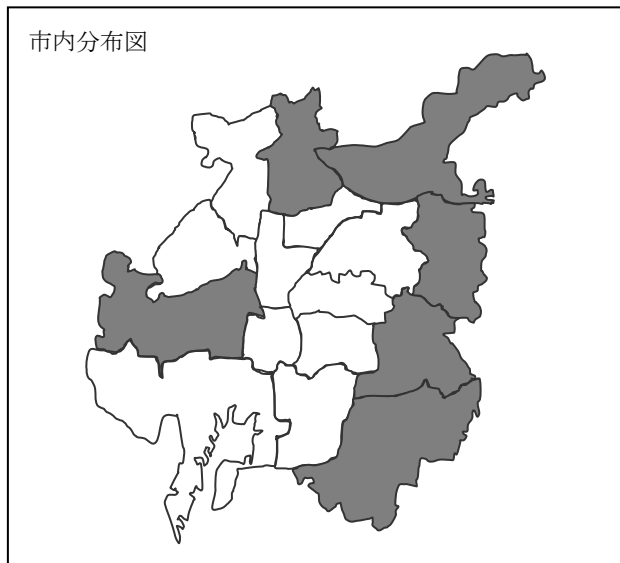
【関連文献】

阿部 永, 2007. キツネ. 増補版日本産哺乳類頭骨図説, p. 243. 北海道大学出版会, 札幌.
 名和 明, 2008. 新修名古屋市史資料編自然目録(新修名古屋市史資料編編集委員会編), 222pp. 名古屋市.
 野呂達哉, 2013. 小幡緑地と金城学院大学で確認されたアカギツネ. 生きものシンフォニー7号. なごや生物多様性センター.
 自然環境研究センター(編), 2004. 第6回自然環境基礎調査-種の多様性調査 哺乳類分布調査報告書-, 213pp. 環境省自然環境局生物多様性センター.

(執筆者 野呂達哉)



アカギツネ
 北区成願寺町北野、2013年6月10日、野呂達哉 撮影



市内分布図

哺乳類 <食肉(ネコ)目 イタチ科>

ニホンテン *Martes melampus* (Wagner)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【選定理由】

2013年5月に市境である東谷山の瀬戸市側で生息が確認された。行動圏が市内に達していることは確実なので、評価対象とした。生息密度は低いものと考えられ、隣接する地域からの個体の流入がない限り、市内で個体群を維持することは難しいであろう。

【形態】

体色はあざやかな黄色から褐色のものまで変異に富む。四肢は通常、黒い。頭胴長 41～49cm。尾長 17～23.3cm。体重 1.1～1.5kg。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区(東谷山地域)。

【県内の分布】

豊根村、設楽町、東栄町、豊田市、新城市、豊川市、岡崎市、幸田町、名古屋市、瀬戸市、尾張旭市。

【国内の分布】

本州、四国、九州、淡路島、対馬。佐渡島、北海道に移入。

【世界の分布】

国外では朝鮮半島南部に分布するという報告がある。



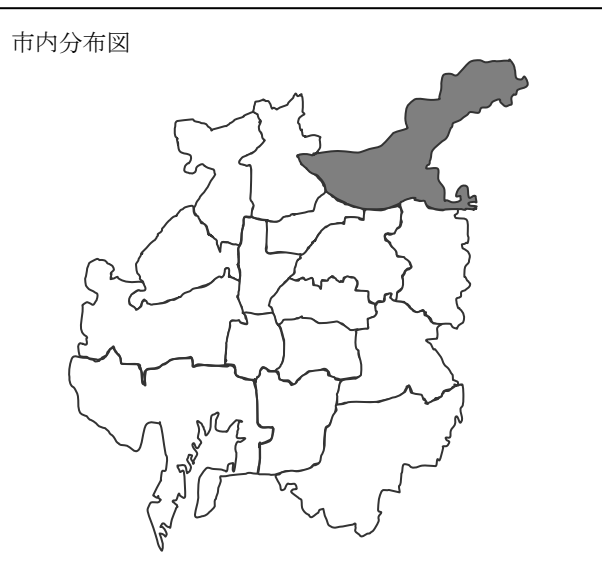
ニホンテン
瀬戸市十軒町、2013年5月、
なごや市民生きもの調査員 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

本種は樹上空間を積極的に利用し(Tatara and Doi, 1994)、河畔林、境界林および林縁部への依存度が高いことが示唆されている(新井ほか, 2003)。雑食性でネズミ類などの小哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、昆虫類、果実類などを採食する。

【現在の生息状況／減少の要因】

最近の市内での確認例は皆無であるが、2013年5月に東谷山の瀬戸市側(瀬戸市十軒町)で生息が確認された。確認場所は市境であるため、名古屋市内にも行動圏に含まれると考えられる。この地域は落葉広葉樹と常緑広葉樹、ヒノキの植林が混在し、大径木が多く、本種の生息に好適な環境にあると推測される。本種が市内の他の緑地に分布を拡大できるか今後注視が必要である。



【保全上の留意点】

生息適地の樹林地を残していくとともに、隣接する地域との繋がりを保つための緑地帯を確保する必要がある。

【引用文献】

荒井秋晴・足立高行・桑原佳子・吉田希代子, 2003. 久住高原におけるテン *Martes melampus* の食性. 哺乳類科学, 43: 19-28.
Tatara, M. and T. Doi, 1994. Comparative analyses on food habits of Japanese marten, Siberian weasel, and leopard cat in the Tsushima Islands, Japan. *Ecological Research*, 9: 99-107.

【関連文献】

阿部 永, 2007. テン. 増補版日本産哺乳類頭骨図説, pp.246-247. 北海道大学出版会, 札幌.
子安和弘・織田統一, 2009. テン. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009 動物編, p.87. 愛知県環境部自然環境課.
高田靖司, 2004. テン. 名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックなごや 2004 動物編, p.32. 名古屋市環境局環境都市推進部環境影響評価室.

(執筆者 野呂達哉)

哺乳類 <食肉(ネコ)目 イタチ科>

ニホンイタチ *Mustela itatsi* Temminck

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

市内での本種の分布はすでに局所的であるのに加え、外来種のシベリアイタチが市街地だけではなく、緑地や山地にまで分布を拡大しており、今後、市内における本種の個体数回復や分布の拡大は見込めない。

【形態】

体サイズに性的二型があり、雌は雄より小型である。頭胴長は雄 27.8～36.9cm、雌 22.9～26.5cm、尾長は雄 11.2～15.1cm、雌 9.0～10.5cm、体重は雄 270～600g、雌 110～180g。成獣の尾率は 50%を超えないとされる。ただし、尾率だけの判定ではシベリアイタチとの誤同定を引き起こす(川口, 2006)。特に幼獣期には適用できない(佐々木, 2011)。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区(上志段味東谷、中志段味天白、中志段味沢田)。

【県内の分布】

県内全域(平地についてはシベリアイタチと置き換わっている可能性がある)。

【国内の分布】

本州、四国、九州といくつかの周辺島嶼。北海道、伊豆諸島、五島列島などに移入による分布がみられる。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

雌は一定の行動圏を持ち、雄はいくつかの雌と重なるような行動圏を持つ。水辺の環境を好み、甲殻類、昆虫類、魚類、カエル、鳥類、ネズミ類などを採食する。

【現在の生息状況／減少の要因】

従来の市内における本種の生息情報はシベリアイタチとの区別が困難な例もある。計測値から確実にニホンイタチと同定できたのは、(高田, 2002)が 1990 年代に中志段味で記録した 2 個体であった。著者らが 2012～2014 年に市内各所で得られたイタチ類 45 個体の標本を同定した結果、本種と同定されたのは、東谷山地域の農地で捕獲された雄 1 個体のみであった。減少の要因として、市街化で生息適地が減少したのに加え、すでに市内の山地や緑地にも進出したシベリアイタチの影響があげられる。

【保全上の留意点】

本種の生息域では、これ以上の人為的攪乱やシベリアイタチの侵入を防ぐ必要がある。

【引用文献】

- 川口 敏, 2006. 香川県産 *Mustela* 属 2 種の事故死体の同定と分布. 哺乳類科学, 46(1): 35-39.
 佐々木浩, 2011. シベリアイタチ 国内外来種とはなにか, 日本の外来哺乳類 - 管理戦略と生態系保全 - (山田文雄・池田透・小倉 剛編), pp.259-283. 東京大学出版会, 東京.
 高田靖司, 2002. 守山と春日井の哺乳類. 私たちの博物館 - 志段味の自然と歴史を訪ねて -, 62:1-5.

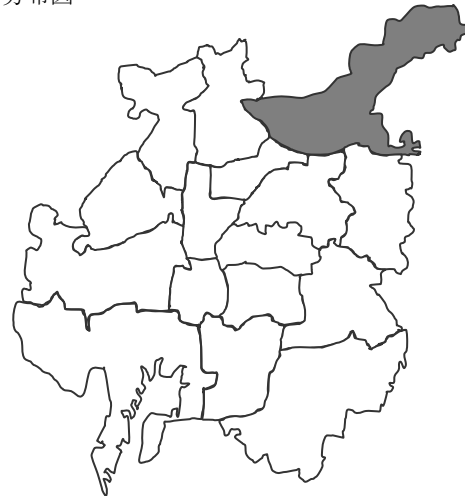
【関連文献】

- Masuda, R. and S. Watanabe, 2009. *Mustela itatsi* Temminck, 1844. In: S. D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (ed.), The Wild Mammals of Japan, pp.240-241. SHOUKADOH Book Sellers, Kyoto.
 米田政明, 2008. イタチ. 日本の哺乳類 [改訂 2 版] (自然環境研究センター編), p.82. 東海大学出版会, 秦野.



ニホンイタチ、
守山区上志段味東谷、2012年5月1日、野呂達哉 撮影

市内分布図



(執筆者 野呂達哉)

哺乳類 <食肉(ネコ)目 イタチ科>

ニホンアナグマ *Meles anakuma* Temminck

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	情報不足
環境省2014	リスト外

【選定理由】

最近の市内での確実な記録は一例のみであり、生息密度は低いものと推測される。生息適地である緑地や農地の減少が著しい市内では、隣接する地域からの個体の流入がない限り、個体群を維持することは難しいと考えられる。

【形態】

体色は背面が暗黄褐色で、腹面は暗褐色。四肢は黒い。両眼周辺は暗褐色。体は頑丈で、四肢は太短く、手の爪は強大。頭胴長 44～68cm、尾長 11.6～18.0cm。体重は 4～9kg。

【分布の概要】

【市内の分布】

緑区(鳴海町大清水)。

【県内の分布】

豊根村、東栄町、設楽町、新城市、豊川市、豊田市、岡崎市、田原市、知多市、犬山市、小牧市、春日井市、名古屋市。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

低山帯の森林、低木林に生息する。地中にトンネルを掘り、血縁の家族群で生活する。雑食性でミミズ類、昆虫類、両生類、果実類などを採食する。

【現在の生息状況／減少の要因】

2013年9月、市内では31年ぶりに緑区鳴海町大清水のブドウ畑で確認された(野呂, 2014)。確認場所には樹林地や農地が残っているが、すでに周辺まで市街化が進んでいる。

【保全上の留意点】

生息適地の樹林地や農地を残していくとともに、隣接する地域との繋がりを保つための緑地帯を確保する必要がある。

【特記事項】

市内では1982年に中区千代田三丁目のマンション11階ベランダで発見された記録がある(朝日新聞名古屋版1982年1月3日)。この記録だけでは野生個体と判断できなかったため、今回の市内分布図には示さなかった。

知多半島では絶滅したとされていたが(宮尾ほか, 1984)、最近、知多市で生息が確認された(エコレコあいち Vol.7 2014年7月25日発行)。

【引用文献】

宮尾嶽雄・花村 肇・高田靖司・酒井英一, 1984, 6. アナグマ. 愛知の動物(佐藤正孝・安藤尚編), pp.309-310. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.

野呂達哉, 2014. 緑区のブドウ畑で確認されたニホンアナグマ. 生きものシンフォニー13号. なごや生物多様性センター.

【関連文献】

阿部 永, 2007. アナグマ. 増補版日本産哺乳類頭骨図説, p.251. 北海道大学出版会, 札幌.

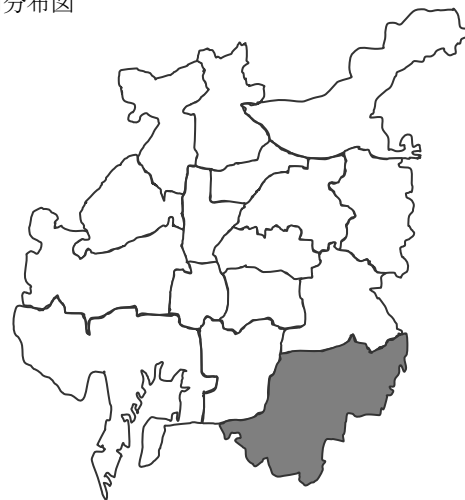
Kaneko, Y., 2009. *Meles anakuma* Temminck, 1844. In: S. D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (ed.), *The Wild Mammals of Japan*, pp.258-260. SHOUKADOH Book Sellers, Kyoto.

子安和弘・織田統一, 2009. アナグマ. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち2009動物編, p.90. 愛知県環境部自然環境.



ニホンアナグマ
緑区鳴海町大清水、2013年9月28日、小島盛夫 撮影

市内分布図



(執筆者 野呂達哉)

哺乳類 <クジラ目 ネズミイルカ科>

スナメリ *Neophocaena phocaenoides* (G. Cuvier)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧 I A類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【選定理由】

市内生息域である名古屋港は、大型船舶が行き来する日本有数の貿易港であり、都市域を流れる河川が多数流入する水域である。沿岸性が強い本種にとって、これら人間活動の影響による生息環境の悪化や個体数の減少が懸念される。

【形態】

頭が丸く、くちばしや背鰭がない。成体の体色は淡い灰色。全長には地理的変異があり、瀬戸内海～響灘と伊勢湾～三河湾では200cm以上の個体もみられるが、有明海～橘湾では最大175cmと小型である。

【分布の概要】

【市内の分布】

港区（名古屋港）。

【県内の分布】

伊勢湾、三河湾。

【国内の分布】

主に有明海～橘湾、大村湾、瀬戸内海～響灘、伊勢湾～三河湾、東京湾～仙台湾沿岸の5水域。

【世界の分布】

ペルシャ湾からパキスタン、インド、インドネシアを経て中国沿岸から日本沿岸まで。

【生息地の環境／生態的特性】

日本では沿岸の海域に生息する。50m以下の浅い水深で水面に岩の露出がない場所を生息域としている。主に魚類、頭足類、甲殻類を採食する。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋港での目視数は海水温の低下する冬季に最も多く、夏季には少ない。名古屋港は海水温が低下する冬季において、火力発電所などの温排水の影響で小魚が集り、本種の格好の餌場になっていると推測されている（斎藤ほか，2014）。

【保全上の留意点】

多くの都市河川が流入し、商船の往来が激しい名古屋港では、本種は人間の生産活動の影響を受けやすいと考えられている（斎藤ほか，2014）。本種の生息に配慮した港の整備や啓発活動が求められる。

【特記事項】

冬季には堀川など市内の河川に餌を追って迷入する個体も見られ、浅瀬に乗り上げるなどして死亡することもある（中日新聞2011年1月31日朝刊など）。

【引用文献】

斎藤 豊・堂崎正博・祖 一誠，2014. 名古屋港に生息するスナメリの調査. 海洋と生物, 36(1): 29-35.

【関連文献】

長谷川修平・大池辰也・浅井康行・村上勝志，2014. ストランディング記録からみた伊勢湾・三河湾のスナメリについて. 海洋と生物, 36(2): 135-141.

Shrakihara, M. and M.Yoshioka, 2009. *Neophocaena phocaenoides* (G. Cuvier, 1829). In: S. D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (ed.), *The Wild Mammals of Japan*, pp.390-391. SHOUKADOH Book Sellers, Kyoto.



スナメリ
三河湾、2014年5月18日、野呂達哉 撮影

市内分布図



(執筆者 野呂達哉)

哺乳類 <トガリネズミ目 モグラ科>

ヒミズ *Urotrichus talpoides* Temminck

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧IB類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

市内では東部地域の緑地に分布するが、生息地は局所的で孤立が著しい。落葉層や腐葉層が豊かで湿潤な土壌環境を好むが、緑地の公園化などによって生息適地が消失または劣化した。市内での生息密度は低いと推測される。

【形態】

半地下性の小型のモグラ類で、前肢は地下性のモグラ類ほど発達していない。尾は棍棒状で太く、ブラシ状の長毛が生える。頭胴長89~104mm、尾長27~38mm、後足長13.8~16mm、体重14.5~25.5g。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区（東谷山、小幡緑地本園、吉根階子田、吉根大鼓ヶ根、川東山）、名東区（明德公園、猪高緑地）、千種区（東山公園）。

【県内の分布】

知多半島を除く県内全域の樹林地など。

【国内の分布】

本州、四国、九州、淡路島、小豆島、隠岐諸島、対馬など。

【世界の分布】

日本固有種。



ヒミズ

名東区明德公園、2009年10月4日、野呂達哉 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

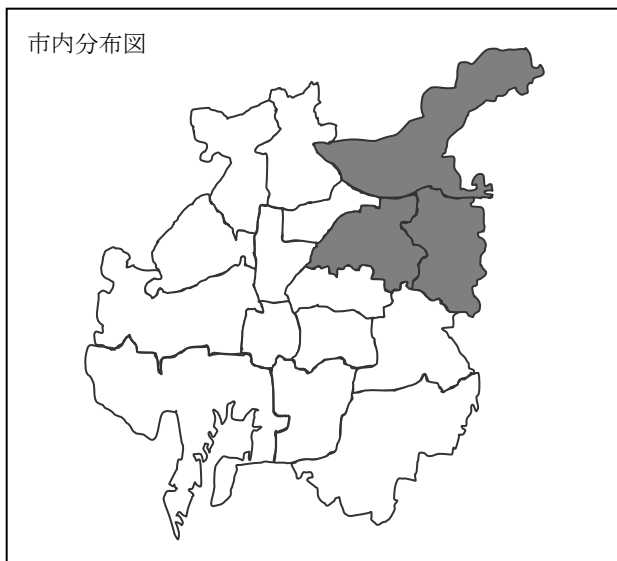
半地下性で、落葉層や腐植層に網目状のトンネルを掘り生活している。樹林地の湿った土壌環境を好み、乾燥に弱い。河畔林にも生息するが、樹林地と繋がっている場所に多く、礫や砂の堆積した河川敷ではあまりみられない（野呂, 2009）。ミミズ類やクモ類、ジムカゲ類、昆虫類、種子などを採食する。

【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県内の山地では普通種であるが、市内での確認例は少なく、分布は局所的である。生息地の開発や植生の伐採等により土壌の乾燥化が進むと生息適地が減少する。確認されている緑地内でも、生息適地は少なく、生息密度は低いと考えられる。

【保全上の留意点】

生息地付近では新たな開発を避ける、落葉の踏み荒らしを防ぐ、側溝に落ちると脱出できないため、脱出用スロープ付のU字溝を取り付けるといった配慮が必要である。



市内分布図

【引用文献】

野呂達哉, 2009. 矢作川河畔林における哺乳類の基礎調査報告. 矢作川研究, 13: 105-112.

【関連文献】

- 阿部 永, 2008. ヒミズ. 日本の哺乳類〔改訂2版〕(自然環境研究センター編), p.18. 東海大学出版会, 神奈川.
 宮尾嶺雄・花村 肇・高田靖司・酒井英一, 1984. 3. ヒミズ. 愛知の動物 (佐藤正孝・安藤尚編), pp. 288-289. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
 名古屋ため池生物多様性保全協議会, 2010. 2009年度なごやため池生きもの生き生き事業報告書, 207pp. 名古屋ため池生物多様性保全協議会.
 名和 明, 2008. 哺乳類. 新修名古屋市史資料編自然 (新修名古屋市史資料編編集委員会編), pp.315-322. 名古屋市.
 高田靖司, 2004. ヒミズ. 名古屋市の絶滅のおそれのある野生動物レッドデータブックなごや2004動物編, p.34. 名古屋市環境局環境都市推進部環境影響評価室.

(執筆者 野呂達哉)

哺乳類 <齧歯(ネズミ)目 ネズミ科>

カヤネズミ *Micromys minutus* (Pallas)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本種の生息場所である高茎草地は、市街化や河川改修に伴う整備によってその多くが消失した。現在残っている場所は極めて局所的であり、小規模の開発でも個体群消失のおそれがある。

【形態】

日本に生息するネズミ類の中では最も小型。体色は背面が赤褐色か暗褐色で腹面は白色。尾の先端の毛の一部はない。頭胴長 54～78.5mm、尾長 47～91mm、体重 5.3～14g。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区(東谷山、小幡緑地本園、八竜緑地、大森、瀬古、幸心、川、吉根、中志段味宮裏、下志段味真光寺、川西)名東区(明德公園、猪高緑地、牧野ヶ池緑地)、天白区(荒池緑地)、緑区(鳴海町笹塚、大高町)、北区(成願寺町北野)、西区(庄内緑地、中小田井)、中川区(富田町万場、富田町長須賀)港区(当知町草野、南陽町藤前)。

【県内の分布】

設楽町、豊田市、新城市、豊川市、豊橋市、田原市、岡崎市、安城市、幸田町、みよし市、日進市、尾張旭市、名古屋市、北名古屋市、春日井市、知多市、美浜町、南知多町、弥富市。

【国内の分布】

本州の宮城県以南、四国、九州、対馬、隠岐諸島、淡路島など。

【世界の分布】

ユーラシアに広く分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

低地の草地に多く、イネ科草本などで球状の巣を作る。草本の茎葉、種子、果実、昆虫などを採食する。春から秋にかけて繁殖し、1回に2～8仔を産む。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内では緑地内の湿地や河川沿い、水田周辺の草本群落で巣が確認されている。局所的で、攪乱されやすい環境に営巣しているため、小規模の開発でも影響を受けると考えられる。

【保全上の留意点】

繁殖期の草刈りは避ける。草刈りを行う場合は何度かに分け、避難できるスペースを残すといった配慮が必要である(畠, 2014)。

【引用文献】

畠佐代子, 2014. 草刈りとカヤネズミの暮らしを両立させるには. カヤネズミの本, pp.93-95. 世界思想社, 京都.

【関連文献】

阿部 永, 2007. カヤネズミ. 増補版日本産哺乳類頭骨図説, p.251. 北海道大学出版会, 札幌.

子安和弘, 2009. カヤネズミ. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009 動物編, p.77. 愛知県環境部自然環境課.

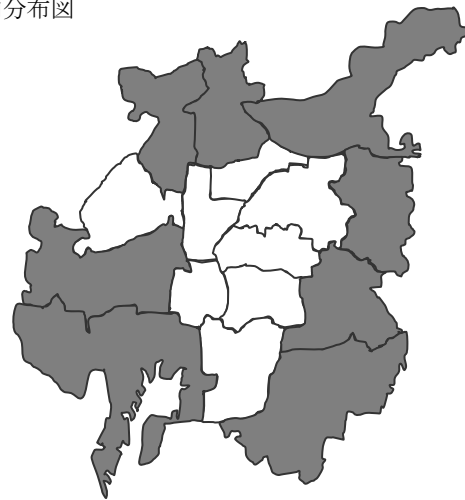
宮尾嶽雄・花村 肇・高田靖司・酒井英一, 1984. 8. カヤネズミ. 愛知の動物(佐藤正孝・安藤尚編), pp.297-298. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.

高田靖司, 2004. カヤネズミ. 名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックなごや 2004 動物編, p.36. 名古屋市環境局環境都市推進部環境影響評価室.



カヤネズミ、北区成願寺町北野、2013年3月31日、宇地原永吉 撮影

市内分布図



(執筆者 野呂達哉)

哺乳類 <トガリネズミ目 モグラ科>

コウベモグラ *Mogera wogura* (Temminck)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	地域個体群
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本州中部以南では普通種であり、市内での分布も広範囲に及ぶが、攪乱の起こりやすい環境に生息し、さらに小個体群に分断されていることから、小規模の開発でも個体群消失に繋がるおそれがある。

【形態】

地下生活に適応し、前肢の幅が広く、尾は短い。頭胴長 125~185mm、体重 48.5~175g。体サイズの変異は大きく、山間部に比較して平地部の個体群は大型化する。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区（東谷山、小幡緑地本園、上志段味、中志段味、大森、川西など）、名東区（牧野ヶ池緑地、猪高緑地など）、千種区（平和公園、東山公園など）、天白区（相生山緑地、荒池緑地など）、緑区（大高緑地、鳴海町笹塚など）、北区（福德町、成願寺町など）、中区（名古屋城外堀など）、西区（庄内緑地など）、中村区（稲葉地町など）、中川区（富田町万場など）。

【県内の分布】

県内全域の森林内、農地、河川敷など。

【国内の分布】

本州中部以南、四国、九州、隠岐諸島、対馬、五島列島、種子島、屋久島など。

【世界での分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

完全な地下性で、土壌層が厚く、主食となるミミズ類が多い場所を選好する。森林内、農地、水田の畦、河川沿いに発達した土壌堆積地などを生息場所としている。

【現在の生息状況／減少の要因】

市街化や道路建設、河川の改修工事等で減少した。現在、公園緑地などに孤立して生息するが、庄内川などの河川沿いにはさらに孤立した小個体群が残存する。

【保全上の留意点】

これ以上の生息地の消失、縮小、分断化を防ぐとともに、人による生息地の踏み荒らしや車両等の侵入を防ぐ必要がある。

【特記事項】

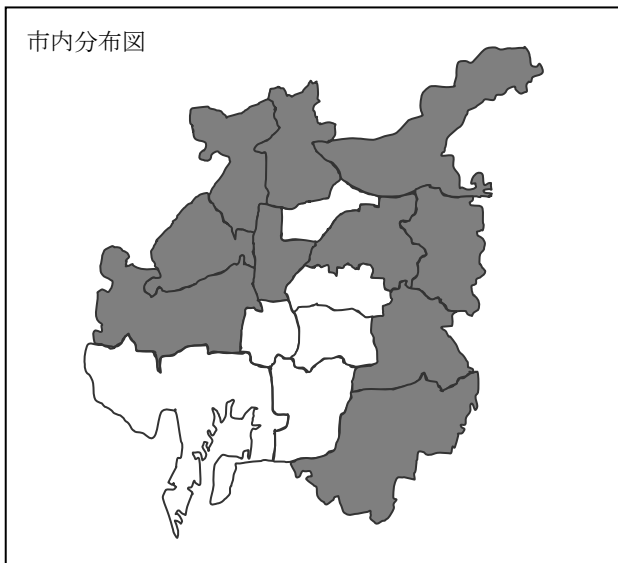
愛知県のレッドリストでは、体サイズの大きい名古屋城の個体群が特徴的な地域個体群に指定されている。名古屋城の個体群は二の丸側と三の丸側の二つの外堀とその周辺に生息する。

【関連文献】

阿部 永, 2008. コウベモグラ. 日本の哺乳類 [改訂2版] (自然環境研究センター編), p.24. 東海大学出版会, 秦野.
 子安和弘・織田統一, 2009. コウベモグラ (名古屋城外堀の個体群). 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009 動物編, p.90. 愛知県環境部自然環境課.
 名古屋ため池生物多様性保全協議会, 2011. 平成 22 年度生物多様性保全推進支援事業 名古屋ため池生き物いきいき計画事業報告書, 81pp. 名古屋ため池生物多様性保全協議会.
 織田統一, 2010. コウベモグラ. 名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックなごや 2010 - 2004 年版補遺 -, p.77. 名古屋市環境局環境都市推進部生物多様性企画室, 愛知県.
 織田統一, 2010. 名古屋城のお堀のコウベモグラ. 生き物から見た名古屋の自然 - なごやの環境指標種 100 (改訂版) -, pp.16-17. 財団法人三菱 UFJ 環境財団, 東京.



コウベモグラ
 中区名古屋城外堀、2010年3月24日、野呂達哉 撮影



市内分布図

(執筆者 野呂達哉)

哺乳類 <齧歯(ネズミ)目 ネズミ科>

アカネズミ *Apodemus speciosus* (Temminck)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧II類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本種は、樹林地や草地、河畔林、農地といった緑被をとまなう多様な環境に生息するが、市内では市街化により緑被の面積が年々減少しており、生息地の消失や縮小、分断化は未だ進行中である。

【形態】

体色は背面が褐色から橙褐色で腹面は白色。頭胴長 83~140mm、尾長 69~129mm で、体重 20~72.5g。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区(東谷山、小幡緑地本園、八竜緑地、竜泉寺、吉根など)、名東区(猪高緑地、牧野ヶ池緑地、高針など)、千種区(平和公園、東山公園など)、天白区(相生山緑地、荒池緑地など)、緑区(鳴海町笹塚、大高町中之瀬など)、北区(成願寺町北野など)、西区(中小田井、庄内緑地)、中村区(岩塚町)、中川区(富田町万場、中須町)、港区(当知町、南陽町藤前)。

【県内の分布】

県内全域(尾張地域、西三河地域、東三河地域、知多半島)で確認されている。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、利尻島、佐渡島、隠岐諸島、伊豆諸島、五島列島、対馬、屋久島など。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

低地から高山帯、草原から森林まで広範囲に分布している。また、樹林地や草地、河畔林、農地といった多様な環境を生息場所としている。雑食で根茎類、種子、果実、昆虫類を採食する。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内では、主に東部地域と西部地域の広い範囲に分布しており、緑地やため池、河川、農地周辺の樹林地や草地が生息場所となっている。生息地である緑被の面積は市全域で年々減少している(名古屋市, 2010)。

【保全上の留意点】

河川敷や農地周辺に残された草地は、一見荒地に見えるため、開発の手が入りやすい。しかし、このような環境も本種にとっては重要な生息場所であり、保全に配慮していく必要がある。

【引用文献】

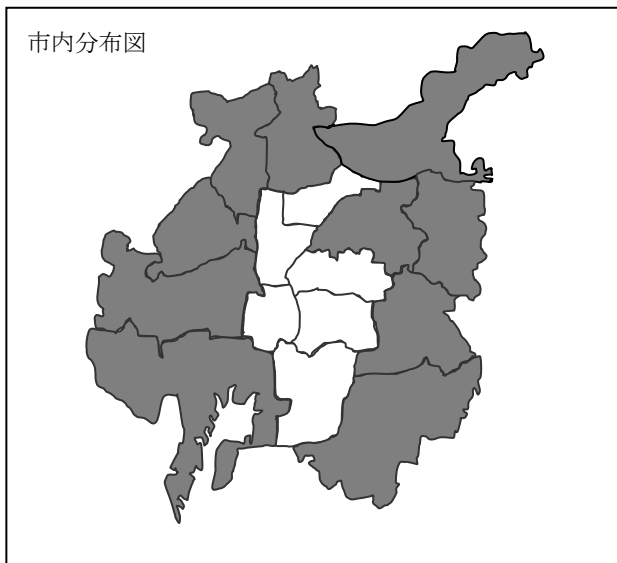
名古屋市, 2010年. 名古屋のみどり - 緑の現況調査報告書 - デジタルマッピング手法による緑被調査. 名古屋市緑政土木局緑地部緑化推進課.

【関連文献】

阿部 永, 2007. アカネズミ. 増補版日本産哺乳類頭骨図説, p.231. 北海道大学出版会, 札幌.
 名古屋ため池生物多様性保全協議会編, 2010. 2009年度なごやため池生きもの生き生き事業報告書, 207pp. 名古屋ため池生物多様性保全協議会.
 名和 明, 2008. 哺乳類. 新修名古屋市史資料編自然(新修名古屋市史資料編編集委員会編), pp.315-322. 名古屋市.
 高田靖司, 2004. アカネズミ. 名古屋市の絶滅のおそれのある野生動物レッドデータブックなごや2004動物編, p.38. 名古屋市環境局環境都市推進部環境影響評価室.



アカネズミ
千種区平和公園、2009年6月15日、野呂達哉 撮影



市内分布図

(執筆者 野呂達哉)

哺乳類 <食肉(ネコ)目 イヌ科>

タヌキ *Nyctereutes procyonoides* (Gray)

【選定理由】

市内では急激な市街化で生息地が失われ、一時は減少したと考えられるが、近年、市街地や都市域での確認例も増え、個体数は回復に向かっていると推測される。ただし、疥癬や交通事故が原因で死亡する個体も多く、未だ予断は許されない状況である。

【形態】

体毛は全体的に灰黒色に見えるが、目の周りや四肢の毛は濃い黒色。尾は太く見える。イヌやキツネに比較して四肢が短い。頭胴長 51.5~68.0cm、尾長 13~19.5cm、体重 3~5kg。

【分布の概要】

- 【市内の分布】
市内全区。
- 【県内の分布】
県内全域（尾張地域、西三河地域、東三河地域、知多半島）。
- 【国内の分布】
北海道、本州、四国、九州、佐渡島、瀬戸内諸島など。
- 【世界の分布】
中国から北の東アジア。

【生息地の環境／生態的特性】

生息範囲は、樹林地から草地、農地、市街地、都市域と広範囲に及ぶ。夜行性で日中は泊り場で過ごす。泊り場は自然のものだけではなく、排水管などの人工物も利用する(吉野, 2010)。雑食性で種子や果実、昆虫類、ミミズ類、鳥類、両生類、爬虫類、小型哺乳類などを食べる。

【現在の生息状況／減少の要因】

2012~2013年の市内におけるへい死個体の回収記録から、すでに市内全区に分布することが明らかとなった。緑地や河川沿いの樹林地、草地などを泊り場や採食場所として利用しており、これらの消失や劣化が本種の減少につながると考えられる。また、疥癬や交通事故で死亡する個体も多いと推測される。

【保全上の留意点】

市内に残された緑地や河川沿いの樹林地、草地は、巣穴や泊り場、採食場所として重要な生息環境であり、これらの消失や減少を防ぐ必要がある。

【引用文献】

吉野 勲, 2010. 新宿御苑におけるタヌキの生息環境. *Animate*, 8: 33-36.

【関連文献】

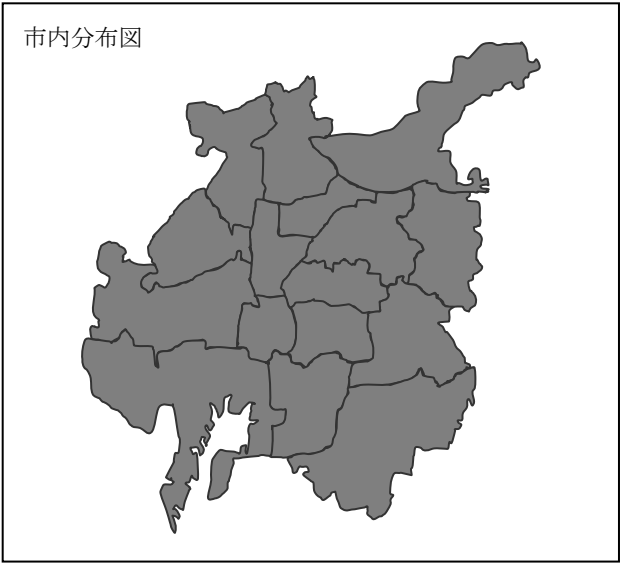
- 阿部 永, 2007. タヌキ. 増補版日本産哺乳類頭骨図説, pp.242-243. 北海道大学出版会, 札幌.
- 千々岩哲, 2006. 川辺林と残存林がホンダタヌキ (*Nyctereutes procyonoides viverrinus*) の行動圏利用に果たす役割. 矢作川研究, 10: 85-96.
- 名和 明, 2008. 哺乳類. 新修名古屋市長資料編自然(新修名古屋市長資料編編集委員会編), pp.315-322. 名古屋市. 自然環境研究センター(編), 2004. 第6回自然環境基礎調査一種の多様性調査 哺乳類分布調査報告書一, 213pp. 環境省 自然環境局生物多様性センター.
- 米田政明, 2008. タヌキ. 日本の哺乳類[改訂2版](自然環境研究センター編) p.74. 東海大学出版会, 秦野.

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外



タヌキ
中区名古屋城外堀、2014年7月12日、酒井正二郎 撮影



哺乳類

(執筆者 野呂達哉)

哺乳類 <偶蹄(ウシ)目 ウシ科>

カモシカ *Capricornis crispus* (Temminck)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

わずかに生息する守山区東谷周辺での生息可能面積は小さい。生息環境の推移から見て圧迫が強まっているにもかかわらず、過去に生息していなかった本種がなぜ市内にまで分布を広げたのか、その原因を含めて生息状況を注視する必要がある。

【形態】

形態に性差はなく雌雄ともに、頭胴長は70~85cm、体重は30~45kgで13cmほどの角を持つ。市内に生息する個体の毛色は、茶褐色が多い。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区(東谷山)。

【県内の分布】

豊橋市、岡崎市、瀬戸市、名古屋市、豊川市、豊田市、新城市、設楽町、東栄町、豊根村など。

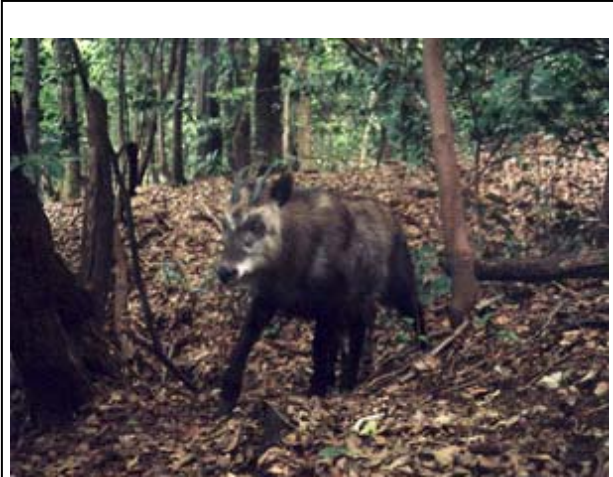
市東部近くの愛知郡東郷町(中日新聞2013年5月21日)や、日進市米野木町(中日新聞2014年10月12日)でも目撃されている。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本固有種。



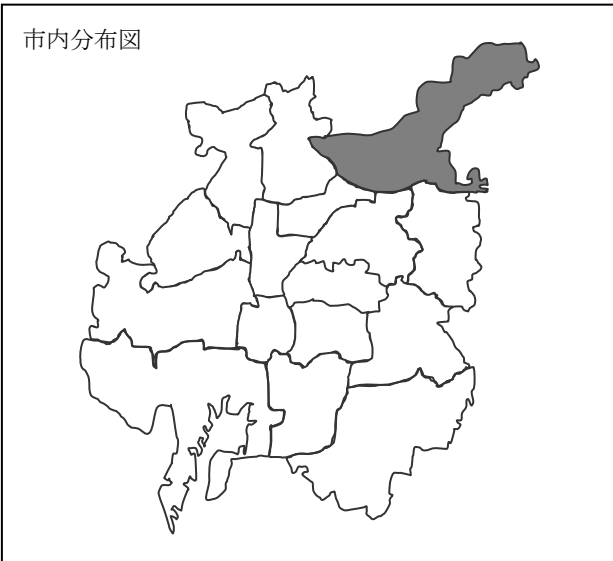
カモシカ
守山区東谷山、2006年9月、名和 明 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

本来の生息地は低山から亜高山帯の落葉広葉樹や針葉樹林帯である。植物食性で主に樹木の葉などを採食する。ふつう、春から初夏に1頭の子を出産する。1ペアで1km²ほどのなわばりを持つ。

【現在の生息状況／減少の要因】

以前には市内で生息が確認されなかったが、1997年以降、守山区と瀬戸市の市境付近で何度も目撃されている(例えば、中日新聞2003年5月22日)。その後、2006~2010年にかけて東谷山周辺で複数のカモシカの生息を確認している。なわばりを持つとされる本種では、一定面積に少数の個体しか生息できない。市周辺で分布が拡大する傾向にあるが、市内では生息可能な面積が小さく、分布を広げても道路網の発達や宅地造成などにより分断化され消滅することが予想される。



【保全上の留意点】

農作物被害や交通事故の要因となる可能性があるため、今後の動向に注意し、情報を収集する必要がある。

【特記事項】

国の特別天然記念物である。愛知県では特定鳥獣保護管理計画の対象種となっており、県東部で捕獲が継続されている。

【関連文献】

- 愛知県環境部自然環境課, 2012. 特定鳥獣保護管理計画(カモシカ), 36pp. 愛知県環境部自然環境課.
- 三浦慎吾, 2008. カモシカ. 日本の哺乳類[改訂2版](自然環境研究センター編), p.113. 東海大学出版会, 秦野.
- 名和 明, 2008. 哺乳類. 新修名古屋市史資料編自然(新修名古屋市史資料編編集委員会編), pp.315-322. 名古屋市.
- 名和 明, 2009. 名古屋市におけるカモシカの記録. マンモ・ス特別号, 11: 69-75.
- 名和 明, 2009. 森の賢者カモシカ-鈴鹿山地の定点観察記-, 185pp. サンライズ出版, 彦根.

(執筆者 名和 明・野呂達哉)

哺乳類 <翼手(コウモリ)目 オヒキコウモリ科>

オヒキコウモリ *Tadarida insignis* (Blyth)

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	情報不足
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

市内では2011年10月に中区丸の内ではじめて確認された。その後、東谷山地域や名古屋城敷地内で本種のエコーロケーションコールを確認したが、市内でのねぐらの情報は無い。

【形態】

体色は黒色。尾が長いのが特徴。前腕長 57~65mm。頭胴長 84~94mm。尾長 48~56mm、体重 30~40g。細長い翼を持ち、高速、長距離飛行に適応している。

【分布の概要】

【市内の分布】

中区(丸の内、名古屋城)、守山区(上志段味東谷の蛭池周辺)。

【県内の分布】

名古屋市以外の確認例はない。

【国内の分布】

北海道(焼尻島)、埼玉県、神奈川県、三重県、京都府、兵庫県、広島県、愛媛県、高知県、熊本県、宮崎県、福岡県(沖ノ島付近)などで確認されている。

【世界の分布】

中国、台湾、韓国など。



オヒキコウモリ
中区丸の内、2011年10月7日、野呂達哉 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

開けた空間を高速で飛行してガ類などを捕える。岩盤の割れ目や人工の建物をねぐらとした例がある。

【現在の生息状況／減少の要因】

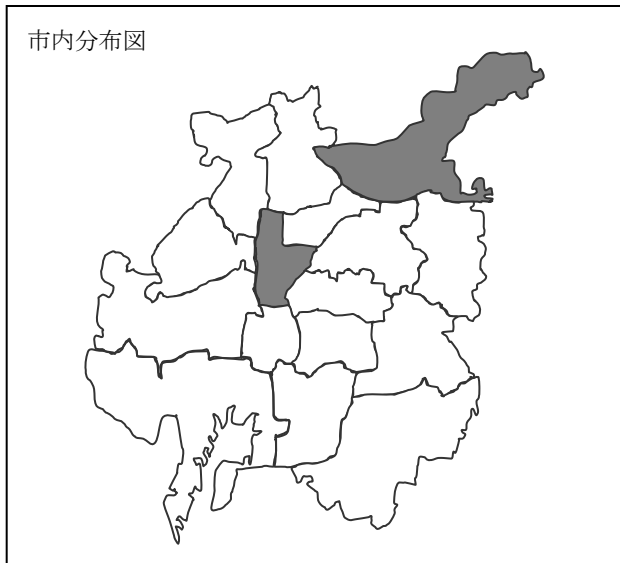
名古屋城では本種が採餌時に発するエコーロケーションコールのバズ音を確認した。城のライトアップによって誘引されるガ類などを捕食していると考えられる。名古屋城の石垣隙間をねぐらとしている可能性があるが、本種は長距離飛行が可能であり、市外にねぐらを持つことも十分に考えられる。

【保全上の留意点】

名古屋城では石垣修復のための解体と積み直しが予定されており、オヒキコウモリのねぐらが無いかな早急の確認が必要である。

【特記事項】

宮崎県枇榔島では乾燥した岩盤の割れ目内をねぐらとしていた(船越ほか, 1999)。また、広島市では4階建ての校舎で400頭を超えるコロニーが見つかった(畑瀬, 2000)。



【引用文献】

船越公威・前田史和・佐藤美穂子・小野宏治, 1999. 宮崎県枇榔島に生息するオヒキコウモリ *Tadarida insignis* のねぐら場所, 個体群構成および活動について. 哺乳類科学, 39(1): 23-33.
畑瀬 淳, 2000. 広島市のオヒキコウモリ. 広島市の生物—まもりたい生命の営み—, p.158. 広島市環境局環境企画課.

【関連文献】

船越公威, 2010. 九州産食虫性コウモリ類の超音波音声による種判別の試み. 哺乳類科学, 50(2): 165-175.
前田喜四雄, 2008. オヒキコウモリ. 日本の哺乳類〔改訂2版〕(自然環境研究センター編), p.62. 東海大学出版会, 秦野.
野呂達哉, 2014. 愛知県名古屋市におけるオヒキコウモリ *Tadarida insignis* の初記録. なごやの生物多様性, 1:65-69.
Sano, A. 2009. *Tadarida insignis* (Blyth, 1861). In: S. D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (ed.), The Wild Mammals of Japan, pp.124-125. SHOUKADOH Book Sellers, Kyoto.

(執筆者 野呂達哉)

哺乳類 <霊長(サル)目 オナガザル科>

ニホンザル *Macaca fuscata* (Blyth)

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

市内ではカテゴリーを判断するに足る情報が得られていない。市内で目撃された個体のほとんどは群れを離れて単独で行動する離れザルである可能性が高い。

【形態】

毛色は茶褐～灰褐色。頭胴長は48～60cmで体重は8～16kg、尾長は7～10cmと短い。成獣では雄が雌よりも大きいことが多い。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区、千種区、名東区、天白区、緑区、昭和区、瑞穂区、熱田区、南区、港区で目撃確認されている。分布図には目撃情報のある区を示した。

【県内の分布】

豊橋市、岡崎市、瀬戸市、豊川市、豊田市、蒲郡市、新城市、設楽町、東栄町、豊根村。

【国内の分布】

本州、四国、九州に生息する。

【世界の分布】

日本固有種。



ニホンザル
守山区東谷山、2004年1月10日、名和 明 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

常緑・落葉広葉樹林が本来の生息地である。10頭から場合により100頭を越える群れで、ほぼ一定の遊動域を移動する。遊動域は1km²未満から20km²以上まで変化する。遺伝子の交流を担っているといわれる単独個体(離れザル)も存在する。近年、市周辺部では農地や住居近くに定住する個体群も確認されている。

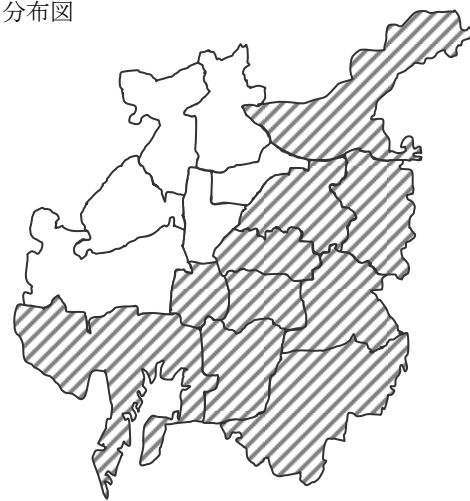
【現在の生息状況／減少の要因】

現在まで、市内で目撃された個体のほとんどは、市外の北部や東部から市内に侵入し、さらに他の区に移動していくと推測される。定住していないと考えられるが、今後も一時的に出現、遊動する可能性がある。現在、市内には本種の群れが生息可能な適地はない。

【保全上の留意点】

県内では農業被害が発生しており、個体数管理を実施するため「特定鳥獣保護管理計画」の対象種となっている。農作物や人的被害につながる可能性があるため、今後の動向に注意し、情報を収集する必要がある。

市内分布図



【特記事項】

2000年以前には、飼育個体が市内で捕獲された記録が2例あるのみで、野生個体の記録はない(中日新聞1975年8月27日、毎日新聞1988年2月12日)。しかし、2000年以降、守山区、千種区、名東区、天白区、緑区、昭和区、瑞穂区、熱田区、南区、港区で20件以上の目撃記録が知られている(中日新聞2002年5月25日ほか)。その多くは離れザルの一時的な移動と考えられる。

【関連文献】

愛知県環境部自然環境課, 2012. 特定鳥獣保護管理計画(ニホンザル), 34pp. 愛知県環境部自然環境課.
Endo, H., 2009. *Macaca fuscata* (Blyth, 1875). In: S. D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (ed.), *The Wild Mammals of Japan*, pp.128-130. SHOUKADOH Book Sellers, Kyoto.
石井信夫, 2008. ニホンザル. 日本の哺乳類〔改訂2版〕(自然環境研究センター編), pp.66-67. 東海大学出版会, 秦野.
名和 明, 2008. 哺乳類. 新修名古屋市史資料編自然(新修名古屋市史資料編編集委員会編), pp.315-322. 名古屋市.

(執筆者 名和 明・野呂達哉)

哺乳類 <偶蹄(ウシ)目 イノシシ科>

イノシシ *Sus scrofa* Linnaeus

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

江戸時代には市内に生息していたが、2000 年前後まで市内での記録がなく、絶滅と判断されていた。最近になり守山区東谷山や天白区相生山での生息が確認された。近隣からの侵入個体もとになっていると考えられるが、詳しい由来は不明である。

【形態】

毛色は褐色から暗黒色である。犬歯が発達しオスでは牙となる。メスで頭胴長 125cm、体重 50kg、オスで頭胴長 145cm、体重 100kg 以上になる。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区(東谷山)、天白区(相生山)。野生個体か定かではないが、西区や北区、天白区、緑区で迷走個体が目撃されている(中日新聞 2004 年 3 月 4 日など)。

【県内の分布】

豊橋市、岡崎市、瀬戸市、長久手市、豊川市、豊田市、名古屋市、蒲郡市、新城市、幸田町、設楽町、東栄町、豊根村など。

【国内の分布】

本州・四国・九州やその周辺島嶼。

【世界の分布】

北アフリカからユーラシア大陸にかけて広く分布。



イノシシ
守山区東谷山、2013 年 5 月 14 日、野呂達哉 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

森林、林縁から農耕地、市街地周辺まで広く生息できる。雑食性で植物の根茎や果実、昆虫など小動物を主な食物としている。産仔数は 4~5 頭と多産である。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内では絶滅と考えられてきたが、最近になり守山区東谷山や天白区相生山で生息が確認された。東谷山では繁殖している。東谷山の確認場所であるヌタ場周辺では、現在、絶滅の危険を示す兆候はない。

【保全上の留意点】

愛知県では個体数の増加、分布の拡大が顕著で、農作物などへの被害が発生している。人家近くへの出没の可能性もあり、市内へこれ以上侵入すると農作物などへの被害、交通事故による車両や人への被害などの発生が懸念される。今後の動向に注意する必要がある。

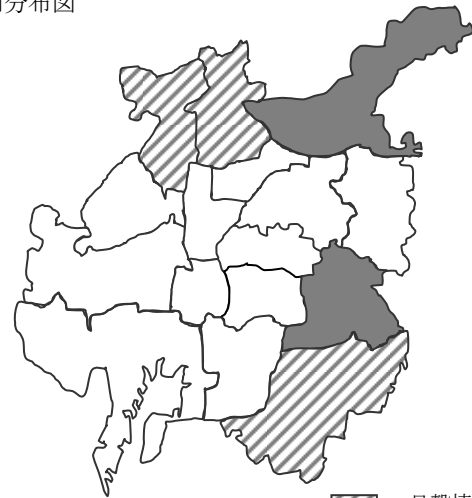
【特記事項】

愛知県では特定鳥獣保護管理計画の対象種となっている。

【関連文献】

愛知県環境部自然環境課, 2012. 特定鳥獣保護管理計画(イノシシ), 31pp. 愛知県環境部自然環境課.
 安達厚三, 1997. 縄文人のくらし. 新修名古屋市史編集委員会(編), 新修名古屋市史第一巻, p.111. 名古屋市.
 Kodera, Y., 2009. *Sus scrofa* Linnaeus, 1758. In: S. D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (ed.), *The Wild Mammals of Japan*, pp.304-305. SHOUKADOH Book Sellers, Kyoto.
 三浦慎吾, 2008. イノシシ. 日本の哺乳類[改訂2版](自然環境研究センター編), pp.108-109. 東海大学出版会, 秦野.
 野呂達哉, 2013. なごやのイノシシ. 生きものシンフォニー8号. なごや生物多様性センター.
 名和 明, 2010. 名古屋市における哺乳類の記録. マンモ・ス特別号, 12: 17-23.

市内分布図



(執筆者 名和 明・野呂達哉)

